

半場 久也



(カットも筆者)

ヨーゼフ・ト

ラーギー宛て

ニューヨーク

一八九四年四月二日

『親愛なる博士！ 私が長い間お返事を差し上げなかつたので、きつとお

怒りのことと存じます。

けれども、私はあなたに知らせなくてはならないはつきりとした事柄がなかつたのです。しかし今は我々がお陰さまでやがてブラーハで再会することを伝えることが出来ます。ニューヨークを五月十九日に出港する船の切符を手に入れました。ですから五月下旬にブラーハへ着くはず

です。  
もしたら、あなたがうんざりする程沢山の事お話しします。当地の若干の新聞は、私が二年の契約で来たと報じていますが、それは本当ではありません。私が留まるかどうかは決めていません。そのことで私等は今一度ブラーハで話し合つてしよう。

私の交響曲については新聞でご覧になりましたね。それは大成功でした。既に印刷されているのです。ジムロックは私の作品を全部買って、新しいものをほしがっています！

彼が来るだろうと仰っていたことは

間違いありませんでした。私はそれを否定していましたが、新しい四重奏曲へ長調と弦楽のための変ホ長調の五重奏曲も書きました。(これらも今、印刷中です)。更に(子供のために)ソナチネをつくりました、ヴァイオリンとピアノです。

またピアノのための組曲と《ダヴィドの詩編》から十曲の歌も作曲しました。(原注・聖書の歌 作品一五五をいっている)

ご承知のように私は勤勉で、お陰さまで健康で元気にしております。少し前にジムロックが私に手紙をくれました。それには、ブラームスが私のことに言及し、こつ書いてあったといつのです。「ドヴォルジャークに言つてください。私が心から彼のことを心配していて、彼の楽しい作品を期待している」と。

彼はつまりとても親切だったので

す。ジムロックの照会に対して序曲集や《ドウムキー》の様な私の作品全部に目を通してくれたのです。即ち初校がライプツィヒから到着した時、それに目を通して誤りを訂正しなくてはなりませんでした。そのことは作曲家にとつてはとても嫌な仕事なのです。けれど彼ブラームスは自分の気持ちを押しえて、この仕事に打ち込んでくれたのです。そのことは私を驚かせたのです。

これが今日あなたに言おうとした全てです。あとはプラーハで、では再会を約束して、皆さんに、宜しく。

もう夜九時半です。明日七時に《ハヴェル号》がヨーロツパへ出港します。ですから私は急いで手紙を出さなくてはなりません。』

コメント ホーム・シツクに罹つていたドヴォルジャクにとつて、首を

長くしていた帰省のチャンスがやっと訪れた。もう一ヶ月少してヨーロツパ行きの船に乗れるのである。文中「……新聞が私の契約期限が二年といっているがそれは本当ではない。……」とある。黒沼ユリ子と内藤久子の著書は共に、彼の契約期限が二年となつている。契約書がどうなつているのが明らかでないが、結局彼はこの翌年、一八九五年四月に永遠

にアメリカを去つていった。サーバー夫人の慰留も聞かずに。

これには、彼女が事業に失敗し、ドヴォルジャークの給料が支払えなくなつたといつことも関係していると思つが（このことは後の手紙に出てくる）。いろいろ文献を調べていると、二年という期限は三年ではなかつたのかな、といふ匂いがあるのである。何故ならば、九二年九月

に就任して、満二年経つた九四年の九月を過ぎて、後六ヶ月留まつていたし、サーバー夫人の手紙から無理に脱出した様に見えるのだ。

## 契約期間を終え帰国の途へ

この手紙には、ブラームスが出くる彼とは一八七七年以来の付き合ひでお互いにお互いの家を訪問し合つていた程、親交があつた。ブラームスが面倒な楽譜の初校に目を通してくれたことにドヴォルジャーク驚ろいているが、恐らくブラームスは可愛い弟のような彼の作つたものに、いち早く目を通じたかつたのであつた。

それから最後の文で、「明日七時に《ハーヴェル号》がヨーロツパへ出港します」は、彼の手紙をその船便で送るつことである。毎日、新聞で船の出入りを注意している彼なら、は……と思わせる。

(つづく)